北朝鮮脱出記

草野道子さん

とりあえず山へ

昭和20年8月13日午前3時半、近所のガヤガヤという声で目がさめる。
「何事？」と聞くと、「ロスケ（註①）が上陸してくるから逃げる。」とのこと。
慌ただしく準備して真暗闇の中を山へ逃げる。

夜が白んできても港が静かなので、他の人々につられ叔母と私は家に戻ってみる。頼みの郵便局も米屋も閉店。仕方なく歩いていると突然、ヒューッヒューッと膝のあたりを弾がかすめる。家でおにぎりを作っていた叔母と急いで山に戻る。

昨日、日赤を退院したばかりの病弱な母、それに弟2人と5人での避難である。父は6月末応召（註②）で、釜山で終戦になり、38度線以北に行けず、復員後、家族の消息を得るために、舞鶴引揚援護局に勤務していた。

運命の岐路

更に奥地へと古茂山まで歩く。駅の軒下で夜を明かし、無蓋車（註③）で茂山着。長時間の停車に汽車から降りて炊事する人がふえ、それならと私達も全員が降りて、豆満江の水で御飯を炊いている最中、急に汽車が動き出し、取り残されてしまった。南鮮行きの最後の便と、後で聞いた。

翌朝、無蓋車に乗れたが白岩で降ろされる。爆撃が始まる。急いで貨車の下にもぐり込む。機関車に無数の弾痕。

2、3日して、

「日本は負けた。戦争は終わった。」と知る。もう内地へ帰るしかない。翌早朝、無蓋車で出発。吉州駅で，ロシア軍戦車からの発砲で機関車をやられ、城津に向かって歩く途中、高周波の社宅前で若いロスケに銃を向けられ、居合わせた10人程くやしいけど降参をする。

暑い中を田の水を飲み、畑から胡瓜をちぎり喉をうるおす。城津では丸腰の日本兵が、背嚢（註④）姿で4列の長い長い縦列で、北に向かって歩いて行くのを見送る。列の中から我々同胞に、干しメンタイを投げ与える光景を何度か見た。自分達も困るのに・・・。

城津から興南は無蓋車。興南から咸興は初めて客車だった。

再び、好機を逃す

9月上旬だったろうか、日本人世話会の指図で、元遊郭『雀の宿』に落ち着く。4畳半に13人だった。
ここで私から順に発疹チフスにかかり、後の人程重症だった。

近くの市場で、早朝キャベツの外葉やタクワンの葉をもらい飢えをしのぐ。大福餅やお握りの立売りもした。1個5銭。

ここで、父のいた鏡城中学卒業生の目にとまり、一人ずつ南鮮に送り届けてくれる事になった。先ず叔母が唖（註⑤）の朝鮮娘になり出発。私も洋服屋の子守りに住み込み、名はドウジャー、洋服も作ってくれ、奥さん

共々可愛がってくれたが、移動命令のため長くは居られなかった。叔母は無事京城(ケイジョウ)に着いたが、連絡が取れないため、長期間待ちながら京城(ケイジョウ)へ滞在したが、帰国した。

富坪(フヒョウ)へ移住

昭和20年12月2日、咸興(カンコウ)市内の各地の収容所などに散らばっていた満州、北鮮の避難民の一部は、移動命令により、咸興(カンコウ)駅前に集合した。約3,300人。私も若い洋服屋に子守りで住みこんでいたが、午前中に連絡があり、元遊郭『雀の宿』にいた母、弟二人と共に、午後、列の後に並んだ。

前列の手続きのすんだ人から順に、殆どが、無蓋車(ムガイシャ)にぎゅうぎゅう詰めに乗せられ、途中では時々みぞれが降る寒い中を、1時間ほど走って4時すぎ、富坪(フヒョウ)の駅に着いた。雨はやんでいた。目的地迄は10分間程の道のりだが、僅かながらも、一切の身の回り品を持っているので、思うように進めない。元気な人達から、目ざす収容所に急ぎ、良いと思われる場所を確保していった。

私達母と子は、長い列の末尾の方で、たどりついた時は、殆どの部屋がすでに満員で、4人が入りこめそうな余地を見出せぬまま、とうとう北のはずれの小さな小屋、馬小屋に落ち着くことになった。ここは元日本陸軍の演習廠舎(ショウシャ)(註⑥)で、終戦後、一時日本軍の捕虜収容所として使用され、その時に板壁ははがされ、窓も戸もないトタン張りのひどく荒れた粗末なバラックだった。

僅かな荷物をおろし、ほっとしたところへ更におくれて、青色の着物を着たやせて背が高い上品な方と、母親によく似た細面の姉、弟、妹の四人家族が来て、空いていた入り口の近くそばに荷をおろした。

富坪(フヒョウ)でのくらし

これから帰国までの間の仮住まいだが、少しでも寒さを防ごうと、それぞれ近くの農家から筵(ムシロ)(註⑦)を2枚10円で求め板張りに敷き、1枚は掛け布団にして4人が寝た。窓も戸も、その近くの人が筵(ムシロ)で防いだ。

翌日から、薪拾い、ご飯炊きだが、12月のこと、北風の吹く屋外では焚けないので、皆、家の中に石でくど(註⑧)を作り、火を燃やすので小屋の中は煙が充満し、とても目が痛かった。煙は部屋一ぱいで床から五センチ以上はもうもうとしていた。配給の豆カスばかりの御飯で、大人達は「これは動物の飼料だったのに」と言いながら食べていた。

私は同じ小屋の人と、一つ先の町「新上(シンジョウ)」まで、副食を買いに行った事が2、3回あった。雪道を歩き、塩や干物、野菜を買ってきたのだろう。1日がかりだった。

月日を重ねると、持ち金がなくなり、駅前あたりの部落に、夕飯時に飯ごうを持って御飯を乞うて回った。それをお粥にして2食分にしていた。

そのうち、母は近くの農家に毛糸編物をしに泊り込み、私も遠い農家に短期間ずつ住み込んで精米の手伝いをした。米つきは根気のいる仕事だった。白くなったようでも、まだまだつかねばならなかった。

地下に眠る犠牲者

咸興(カンコウ)から具合の悪いまま来た人達に始まり、毎日沢山の人が、寒さと飢えに加えた発疹チフスや、ロシアの風土病再帰熱(サイキネツ)で、数日間横になっていると思うと亡くなっていた。1日に30人も40人もの死者で葬りきれ

ず、演習用の古い塹壕を掘り広げ、幅2メートル、深さ1.5メートル程にし、筵(ムシロ)に巻いて荒縄で梱包した巨大な冷凍新巻(註⑨)を壕の底から順に重ねていった。すきまには子供の新巻をつめ、いっぱいにならないと土をかぶせなかった。このためだろう、死体の金歯が荒らされていると耳にした事がある。私の家族は咸興(カンコウ)で発疹チフスにかかったので、富坪(フヒョウ)では幸いしたと思われる。

伐採作業

1月下旬から演習林の伐採作業がはじまり、元気な人は材木運搬の仕事をした。切り口の大小で賃金が支払われる。私も体に応じた直径2.3寸の材木を横長に背負い、1本につき3円位、1日に何回か往復した。材木がなくなると松の小枝を束ねたもの、これは安かった。仕事がだんだん山奥になり道のりも遠くなった。やめる人もふえたが、やめられない。炭俵もかついだが、雪をかぶりぬれた炭俵はとても重く、途中でたまらず休憩したら立ち上がれなくて困った。皆くだってしまって、誰も通らない山道で膝をつき、満身の力を込めて立ち上がれたが、この時初めて目から火が出たのを憶えている。無理がたたったのか、その後発熱して起きられなくなったが、幸い注射で回復した。山で働いた分は全部注射代になったかも知れない。

安藤先生の御家族のこと

最後に来られた方は、清津高女(セイシン)(註⑩)の安藤先生の御家族とあとでわかった。入口は人の出入りが激しく、厳寒期の開閉の度に身は冷えたと思う。

奥様が、小さいお嬢さんが泣くので、抱いて炊事をしていたように思う。「ヒロシ」と呼ばれた男の子がよく働いて、薪とりなどしていたようだった。数日して女の子が泣かなくなった。やはり寒さと飢えだったと思う。どの家庭も近親者は泣く元気もなく放心状態で、使役の人が始末をしてくれるのを茫然と見ている感じだった。

医者も薬も滋養豊富な食物もない、吹きさらしの荒れた馬小屋に住んでいたら、死んでもおかしくない状態だった。男の子も次第にやせて、手や足は枝の上に皮膚がはってあるような風にみえた。元気なく座ったり横になったりしていたが、ある日気づいた時は、もうここの住人ではなかった。

母親と姉の2人だけになり、ゆっくり手足を伸ばして休めるように場所が広くなっていた。姉の方も空腹を訴えるのであろう。母親が困っていたようだ。それから後、住み込みの働きから帰った時は、もう入口の人はいなかった。母親は亡くなり、姉は孤児収容所に移されたとのことだった。

夜トイレに起きた時外に出ると、空には星がまたたき北の方角からは燐(リン)(註⑪)が沢山燃えていたのを見た。こわいけどきれいだった。

春来たる

4月上旬だろうか、北風吹き荒れる山野にも、明るい日ざしがふりそそぐようになると、色々の植物が芽を出しはじめた。青野菜に飢えていた私達は、小さな草まで根こそぎ取った。タンポポの根の長かったこと、オオバコの根の多かったこと。スイバ、ノビル、アカザなど、ゆでたり、おもゆに入れたりして食べた。増配の米は節約して売り、副食物にかえたのである。米を鉄カブトで粉にし、ゆでたヨモギとまぜて作った団子はとてもおいしかった。

２月末には帰れる。３月はじめには帰れるというデマに帰国の望みをつないで生きていたが、いつ帰国できるかわからないし、暖かくなったので、帰りたい一心から、同室の人達と脱出を決意する。

脱出に成功

第１団が脱出した後、バーン、バーンと銃声を聞いたが、戻って来た気配はなかった。

数日後、歩けそうな家族が話し合って未明に出発した。絶対に声を出すな。前の人にしっかり付いて行くように。と命令され、守らなければ大変だし、しかも家族は離れないように、緊張して出発する。

夜中に雪が凍てつき、踏めばバリバリと音がするので、気付かれるのではないかとハラハラしながら、急いで歩く。鉄条網をくぐり抜ける。保安隊の銃が、今鳴るか、今鳴るかと心臓の高鳴りを覚えながら、ひたすら歩く。

どうやら無事に逃げることが出来たと、ホッとしていると、ロスケが30名位輪になり、キャンプの火を囲んでいた。ギクッとする。下を向いて急ぎ足で、前の人に付いて歩くだけ。ロスケは、もう見なれているのか、我々には無関心だった。よかったと、胸をなでおろす。

昼は歩き、夜は、民家の軒下や、倉庫等に体を横たえ、午後や夕方に川があれば、そこで夕食を作り、野宿をしたりして、4日程で元山（ゲンザン）に着く。

ここでは、大きなお寺で数日間を過ごした。沢山の避難民がいて、それぞれかまどを築き食事を作った。夜露を受けずに寝られるのはありがたかった。

元山（ゲンザン）から行ける所までの切符を買い、朝鮮人と一緒に乗ったが、三紡（サンボウ）の駅で停車中、満員のため一寸降りたすきに、予告なしに発車して、荷物は網だなに載せたまま乗れなかった避難民がいた。列車は山中をのろのろと走った揚句、駅でない所に停車して、

「日本人は降りろ！」と言われ、やむなく降りた。

又、僅かの荷を背負って、昼は歩き、夜は綿のように疲れて眠り、南へ南へと進む。

38度線

鉄原（テツゲン）を通り、蓮川（レンセン）を過ぎた頃から、人目をさけて山道に入り込む。同時に出発した人達とは、年齢、体調等違うので、いつの間にか知らない人達と歩いている。しかし、皆思いは同じ、黙々と歩き、追い越される。

村人や、通行人に道を聞きながら、やっと、広い河岸にたどり着く。南・北鮮の境界を分ける大河である。先着が大勢いて、100人程の集団になっていた。

舟賃の交渉で時間をとり、結局お金のある人が舟賃を払って先に乗り、ない人は最後に乗せてもらう事になった。いつ保安隊が来て発砲するか分からないので、黙々と行動する。川幅は広く、川底の砂が透き通って見えたが、相当深かったと思う。音もなくゆったりと流れ、運河のようであった。

舟から降りた所は南鮮（ナンセン）である。もう大丈夫とは思いながらも、弾が恐くて急いで河岸を離れた。

最初の駅、東豆川（トウドゥセン）に着いたのは、午後3時頃だった。家族がそろうのを待って、DDT（註⑫）を浴び、えんじのビロード張りの客車に乗った。

京城（ケイジョウ）で１泊して釜山（プサン）へ出た。上陸用舟艇で釜山（プサン）を離れ、博多へ上陸した。

何がなんだか分からないまま、慌ただしく家を飛び出してから、つらい事、悲しい事、ひもじかった事、寒かった事、数多くあったが、家族そろって日本の土を踏めたのは、翌年昭和21年5月29日であった。

註釈

① ロスケ：ロシア人またはロシアの蔑称
② 応召（オウショウ）：軍人が召集に応じて指定された所に集まること
③ 無蓋車（ムガイシャ）：砂利・鉱石・木材などの雨に濡れてもかまわない積荷を運ぶ台車
④ 背嚢：兵士や軍人が、行軍の時に背負う革や布製の四角いかばん、リュック
⑤ 唖（オシ）：耳が聞こえず、ことばが話せないこと
⑥ 廠舎（ショウシャ）：軍隊が演習先などで仮設する、四方に囲いのない簡略なつくりの小屋
⑦ 筵（ムシロ）：わらなどで編んで作った敷物
⑧ くど：かまど
⑨ 新巻：塩漬けにした主に鮭の保存方法で、わらで巻いていたのが転訛し、あら巻きとなった
⑩ 清津高女（セイシン）：日本統治時代に清津市にあった公立高等女学校
⑪ 燐（リン）：おにび（鬼火）、きつねび、ひとだま
⑫ DDT: かつてハエやシラミなどの衛生害虫、あるいは農作物の害虫防除に広く用いられた

＊原文のままで掲載しています。

草野さんが移動した経路を地図でご紹介します→